

工事完成

国道140号（新山梨環状道路東部区間I期）道路改良工事その2（一部債務）

工期：令和元年12月～令和3年5月 施工者：齋藤建設株式会社

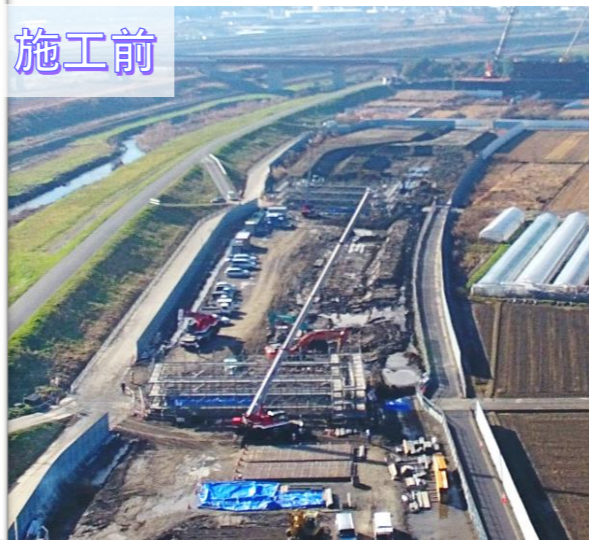
工事概要：道路改良工事 L=411m 盛土工 V=49,810m³ 地盤改良工（中層混合処理工） V=5,157m³
補強土壁工 H=2.6～6.6m A=174m² 場所打函渠工 N=1箇所 仮設道路工 1式

完成



東部区間1期の落合町へ続く道路の盛土工事を行いました。

施工前



地盤改良工



モニターを確認しながら、地盤が弱い箇所にセメントを混ぜていきます。



この様なモニターで改良深度やセメント量を管理し品質を確保しています。

場所打函渠工

鉄筋を組む、枠組みを造る、コンクリートを固める作業を繰り返して函渠を造ります。



↑スペーサー位置を確認しています

スペーサーとは、鉄筋の**かぶり**を保持するもの。作業中鉄筋の上に乗って作業するため、鉄筋の乱れを防ぐ役割もあります。

かぶりって？

「コンクリート面から鉄筋までの最小距離」

鉄筋を保護する目的があり、コンクリートの四方から、基準以上の距離を確保する必要があります。

しかし、鉄筋のかぶりを取り過ぎると、逆に鉄筋の効果が薄くなってしまふ為、この性質についても注意が必要です。

プロの職人さんは、数ミリ単位の世界で緻密に配置を計算して鉄筋を組み上げていきます。



補強土壁工

安定勾配を取れないところは、補強土壁を造りながら土を盛っていきます。

土を敷いては固める作業を、何度も繰り返しながら土台部分を造ります。

盛土工



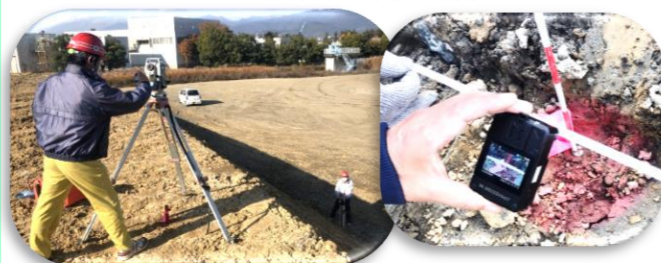
設計通りに出来ているかを確認しています ⇒

設計通りであることを確認できたら、この工事の完成となります。



えんかくりんじょう 遠隔臨場

で 段階確認を行いました



2020年度から建設現場の「遠隔臨場」の施行が始まりました。コロナ禍で普及したリモートワークの建設現場版ともいえるシステムです。現場に行かずとも離れた場所から「材料確認」「段階確認」「立会」を行うことができます。

作業員がウェアラブルカメラを装着したり、ネットワークカメラを設置したりすることで、リアルタイムに現場の状況を確認することができます。遠隔臨場を導入することで移動のコストと時間の削減が可能で、建設現場の生産性の向上につながります。

石灰を使った土質改良

今回の工事では、土の有効活用を目的とした石灰を使った土質改良を実施しました。石灰は**可塑性**という特長があります。

石灰を使う利点は、低強度から高強度まで、**ケースに応じたレベルの改良強度が可能**な事、**ヘドロや有機質土などにも使える**ことなどがあります。よって石灰を混ぜることで盛土として使えなかったヘドロが盛土材に使用できるまで土質が改善される効果があります。



可塑性とは

可塑性の語源はギリシャ語の**形作ること**を意味する「plastikos（プラスティコス）」英語で「plastic（プラスチック）」といいます。